

## 特集「キリスト教殉教と歴史的記憶」

### まえがき

2018年9月7日～9日にかけて、大谷大学（京都市）で開催された日本宗教学会第77回学術大会において「キリスト教殉教と歴史的記憶」と題するパネル発表（代表者：トロヌ・カルラ）をおこなった。そこでの目的は、日本キリスト教史をたどりながら、キリシタン殉教についての「記憶」が近世から現代にいたるまでに、日本国内外でどのようにつくりあげられてきたのかを分析することにより、カトリック教会やカクレキリシタン共同体の宗教的アイデンティティにおける殉教者の歴史的記憶の役割をあきらかにすることであった。

メンバーは本研究会の会員を中心とし、トロヌ、芦名定道、狭間芳樹、各会員が発表をおこない、岩野祐介会員はコメンテータを担当した。そのほか研究会外部からは、新約聖書研究者の浅野淳博氏（関西学院大学大学院神学研究科教授）に発表者として加わっていただいた。「〈福音にのっとった殉教〉によるインクルーシオ：『ポリュカルポス殉教物語』の文学的考察」（『聖書学論集』日本聖書学研究所、2013年）をはじめ、旧約と新約とを結ぶ旧約続篇（外典）において生まれた殉教思想について研究されている浅野氏の議論は本パネルにおいてもきわめて有益なものとなると考えた次第である。

本号では、各パネラーの口頭発表およびコメントを原稿化し、掲載することにした。なお各題目はパネル発表時のものと同じであるが、学会当日の質疑応答で浮かび上がった課題なども含めて加筆修正がなされているため、以下に発表時の概要を付記しておきたい。

\* \* \* \* \*

キリスト教史において「殉教」とは迫害下にありながらも自らの信仰を棄てず、苦しみや死をえらぶことであるとされる。キリストに倣い、そのように信仰を証した殉教者は、敬われ、歴史的記憶として守られてきた。しかし今日の日本において、近世キリシタン時代の殉教というのは感傷的・情緒的に捉えられるにとどまり、いささか漠然としたイメージのまま、無批判に美化されてきたためか殉教の考究は十分になされてこなかった感が否めない。

そこでキリスト教の殉教について新たな検証を進めるにあたり、本パネルでは「歴史的記憶」という視座からの分析をこころみた。まず浅野氏による第一報告では、キリスト教殉教思想の起点について、紀元前のユダヤ人による抵抗運動が展開されるなかでマカバイ殉教思

想が生まれ、その後、圧政下のユダヤ人共同体により記憶された殉教物語が原始教会へと引き継がれたこと、さらにパウロの神学構築がマカバイ殉教思想の再解釈という側面を有しているといった背景が紹介されるとともに、『ポリュカルポス殉教物語』では殉教者の死に救済的価値が見出されないことなどが論じられた。つづく第二報告で狭間氏は、16～17世紀の日本で生じた殉教現象を古代キリスト教との媒介として接続することを希求したイエズス会が、信徒たちに殉教をどのように説いたのか探るにあたり、キリシタン版の聖人伝を手がかりとして考察するなかで、イエズス会士が仏教語や教説を援用しながら邦訳したことが人々にキリストの受難を理解させ、殉教精神を涵養させることにつながったことを考察した。また、トロヌ氏による第三報告では、禁教期を通して近世から現代まで、カトリック世界によって日本の殉教者の歴史的記憶がどのように守られてきたのかということを検証するために、公式な「列聖プロセス」によって福者や聖人として認められた殉教者の特徴（国籍・性別・聖職者か俗人か）を分析するとともに、近世から現在に至るまでの各事例の比較をおこないながら、列聖の対象や時期を社会・歴史的な背景との関わりについて考察をおこなった。そして第四報告で芦名氏は、近世キリシタン時代の殉教が日本キリスト教史の出来事として記憶され、その影響は現代にまでおよび、日本人の宗教性のなかに存している一方で必ずしも自覚された影響ではないとの見解を示した上で、現代日本のプロテスタント思想における「殉教」論を具体的にとりあげながら、「殉教」論が現代日本のキリスト教思想にとっていかなる意義を有するのかを論じた。

以上の報告を受け、コメンテータの岩野氏より、パネルの全体テーマについて、次いで各報告者へのコメントと質問がなされた。質疑応答の議論を通して浮かびあがった今後の課題を挙げると、まずパウロにおいて決定的な贖罪としての殉教はイエスのみであったにもかかわらず、後に救済の対象が信徒個人へと移りゆくなかで殉教者の顕彰が進み、殉教者伝が編纂されていったことへの検討がある。聖遺物とともに聖人への崇敬・崇拝が興隆する中世ヨーロッパのキリスト教については、すでにこれまでの潤沢な先行研究があり、詳しく論じられているため、そして何より、パネル発表では日本における殉教に焦点をあてることを目的としたことから敢えて扱わなかったものの、それらがキリシタン時代に一定の宣教効果をあげたことは確かであり、今後、そうしたところにも目を配りながら、いっそうの解明をすすめたい。

なお、このパネルはトロヌ氏が芦名氏との共同研究として、現在、京都大学でおこなっている日本学術振興会・外国人特別研究員事業の成果の一部であることを申し添えたい。

パネル代表者 トロヌ・カルラ  
文責 狭間芳樹